

ヘンリー・ジェイムズの「友だちの友だち」
— 語り手の“ファンタジー” —

神 崎 ゆかり

Henry James's "The Friends of the Friends"
— The Narrator's "Fantasy" —

Yukari KANZAKI

Abstract

Henry James's "The Friends of the Friends" first appeared in 1896 under the title of "The Way It Came", two years before the publication of *The Turn of the Screw*, perhaps the most provocative ghost story written by James. Since Edmund Wilson argued that the ghost in *The Turn of the Screw* was simply a production of the narrator's mind, many critics have also focused on the mind of the narrator in "The Friends of the Friends." They conclude that the narrator is jealous of her friend who shares the psychical experience with her fiancé, which makes the narrator imagine the ghost of her friend. To read this story simply as a product of the narrator's jealousy, leaves some inconsistency remaining.

The ambiguity of the ghost and the narrator's enigmatic behavior lead the reader to another interpretation. This paper demonstrates the alternative reading that the narrator, obsessed with her hypothesis, creates her "fantasy" in the sense used in psychoanalysis, meaning 'the imaginings to which we are all addicted, but which some disturbed persons take in greater or lesser degree as "fact."' At the end of the story we realize that we have been caught in the narrator's imaginative world and that "The Friends of the Friends" is James's "amusement" to catch those readers who are "not easily caught."

ヘンリー・ジェームズ (Henry James, 1843-1916) の短編「友だちの友だち」(“The Friends of the Friends,” 1896) は、『ねじのひねり』(*The Turn of the Screw*, 1898) の2年前に発表された。当初のタイトルは「こうなった経緯」(“The Way It Came”)であったが、ニューヨーク版で現在の「友だちの友だち」に改題された。『ねじのひねり』に比べるとその知名度は決して高いとはいえないが、技巧に満ち、さまざまな解釈を誘う不思議な作品である。また『ねじのひねり』や「にぎやかな街角」(“The Jolly Corner,” 1908) 同様、ゴシック小説に分類されるこの作品は、ジェームズが関心を抱いていた幽霊(亡霊)のテーマを論じる上でも欠くことができない。

物語は、短い前置きと七つの章で構成されている。前置きの語り手は、出版社の編集者らしき人物だが性別は明らかでない。内容は、ある女性が綴った日記に対するコメントである。日記は、語り手の知人と思われる人物から送られてきたものらしい。語り手によると、女性の日記は「時には自分のことを書いているかと思うと、他人のことであったり、それが混ざっていたり」、「明瞭である」かと思えば「恐ろしく分別に欠ける」ものであったりする。それは驚くに値する内容であるが、彼女の「友だちという人たちの名前も頭文字も言及されていない」ため信憑性に欠けるという。¹⁾

これに続く七つの章がその日記である。章分けは語り手による便宜上のもので、著者によるものではない。さて、その日記の内容はというと、著者の女性(一人称の「私」)が、自分の婚約者と一人の女友だちが共通の体験を持つことを知り、二人を引き合わせようとするところから始まる。「私」の婚約者と女友だちに共通する体験とは、どちらも遠く離れて住んでいたそれぞれの親の死に際し、その亡霊に会ったというものである。女友だちは、彼女の父親の亡霊に、そして婚約者は彼の母親の亡霊に、それも同じ時期に遭遇している。この奇妙な類似性に興味を抱いた「私」は、他の友だちと協力して二人を引き合わせようとするのだが、常に行き違いがあってなかなかうまくいかない。そのうち五年の歳月が流れ、今度こそ絶対にとっていた矢先、女友だちの別居中の夫が亡くなったためまたもや失敗に終わる。結局、二人は出会う機会を逃したまま、ある晩女友だちが急死してしまう。ところが不思議なことに、彼女は亡くなる直前、「私」の婚約者のアパートを訪問し、彼に会ったという。しかし、彼の過去の心霊体験を考えると、「私」には彼が会ったのは生きていた「彼女」で

1) Henry James, “The Friends of the Friends,” *Henry James: Stories of the Supernatural* Ed. Leon Edel (New York: Taplinger, 1980) 396-97. 本文中の引用はすべてこれに依る。以下、引用箇所のページは本文中に記す。

はなくその亡霊であるとしか考えられない。そして、その後も婚約者が幽霊となった彼女としばしば密会しているのではないかと思うと、そのことが許せず結局婚約を破棄してしまうというのがこの作品のあら筋である。

II

「私」の婚約者は本当に女友だちに会ったのか、それともそれは「私」が考えるように亡霊で、彼の特殊な靈感が引き起こしたもののなのか。この点についてジェイムズはどちらともとれる曖昧な書き方をしている。そのため、彼が会ったのは彼女の幽霊か否かという問題が読者の興味を誘う。そこで彼の主張や、その状況説明を細かく分析して、果たして彼女は幽霊か否かを吟味したくなる。しかし、そのような分析を通して幽霊の実体を証明したところであまり意味がないと思われる。なぜなら、この物語の視点人物はあくまでも「私」であり、その「私」は彼がいくら否定しようとも、彼女が幽霊だと信じているからである。さらに「私」による一人称の物語は、編集者らしき人物も指摘しているように、どこまでが真実でどこまでが偽りか分かりにくい。このような視点人物の主観が介入している限り、その主張を無視して議論しても得られるものが少ないと考えられる。したがって問題とすべきは、婚約者のところに現れたのがたとえ生きていた彼女であったとしても、その可能性を考える以前に、「私」にはそれを認めることができない事情があったように思われることである。ジェイムズ文学の功績の一つが「視点人物」の確立であることを考えると、やはり焦点を絞るべきは語り手「私」のこの頑な態度であろう。

語り手の心理に注目する解釈は、『ねじのひねり』の幽霊を性的抑圧に苦しむ女家庭教師の妄想による幻覚であるとするエドモンド・ウイルソンに始まるといわれている。²⁾ ウイルソンに倣うならば、この物語においても婚約者のところに女友だちが現れたのをきっかけに、二人が彼女の死後も密会を続けていると主張し、それが許せないから別れるという「私」の異常なまでの嫉妬心がまず問題になる。つまり、愛する男性が、女友だちと自分にはない能力を共有していて、その力によって自分の手の届かないところで結びついていると考えたと耐えられないのだ。相手の想像の世界すら許せないとなるとその嫉妬心は尋常ではないだろう。

しかし、「私」という人物の嫉妬心が物語のテーマだと結論づけるならば、つじつまがあ

2) Christina E. Albers, *A Reader's Guide to the Short Stories of Henry James* (New York: G.K. Hall, 1997) 279. Edmund Wilson, "The Ambiguity of Henry James," *Henry James: Critical Assessments Vol. III*. Ed. Graham Clarke (The Banks, Mountfield: Helm Information, 1991) 164-196. Originally published in *Hound and Horn*, April-May 1934, 385-406.

わず理解に苦しむところがいくつかある。たとえば、婚約者と女友だちの關係に嫉妬する「私」が、なぜ二人を執拗に引き合わせようとするのか。最初、彼に彼女を紹介して会うように勧めたのは「私」である。二人はすれ違って何度もその機会を逃すが、むしろその方が「私」にとっては好都合のはずである。それにもかかわらず、「私」は二人を引き合わせることに懸命で、しかも五年間もその実現に向けて努力していたのはどのような心境であろうか。

また、彼も彼女も写真を撮られるのが嫌いなのに、「私」はしつこく迫り、まず彼の写真を手に入れる。そして、その写真と対をなすような彼女の写真を求めたところ、対をなすべき写真は婚約者同士のものであると反論して断るのは彼女である。さらに、「私」は女友だちの死後、彼に彼女との密会を執拗に認めさせ、ついには別れてしまうのだが、その後彼が亡くなったと知ると悲しむどころか、まさに予想通りといわんばかりに納得していることは極めて理解しがたい。これらは明らかに論理的整合性に欠けると思われる。それに、もしも婚約者と女友だちが靈感を共有し、彼女の死後密会できるのならば、二人はなにも五年もの長い歳月を待つまでもなく、もっと早い時点でそれこそ靈的に会うことが可能だったのではないだろうか。とにかく、「私」の語りには至るところに不可解な部分が残る。

もちろん、最初「私」は軽い好奇心から二人を引き合わせようとしたのだが、二人の類似点を発見するにつれて嫉妬を感じるようになり、二人の距離が近づくとその気持ちがエスカレートしてヒステリックなまでになったとも考えられる。確かに、この作品には「私」という女性の嫉妬心が表出されていることは間違いない。しかし同時に先に述べたような疑問点は、この作品を単に語り手である女性の嫉妬の成り行きとして片づけるにはもの足りず、読者を別の読みへと誘うことも事実である。

そこで本論では、この物語は当時流行していた心靈現象に関心を抱いていた「私」が、恋愛に関する自らの仮説に固執するうちに「ファンタジー」(妄想)を生み出したものであると考えたい。ここでいう「ファンタジー」とは、レオン・エデルがいう、「誰も心を奪われるものだが、精神に問題のある人はそれを現実と錯覚するような想像」(“fantasy” in the sense in which psychoanalysis uses the term today — that is, the imaginings to which we are all addicted, but which some disturbed persons take in greater or lesser degree as “fact.”)³⁾ のことである。すなわち女友だちは、「私」の妄想が生み出した存在で、この物語はすべて「私」による空想ではないかということだ。そう考えると、これはジェイムズ自身が『ねじのひねり』の序文で主張しているような「アミュゼット」(amusette) の一つで、

3) Leon Edel, “Introduction to *The Turn of the Screw*”, *Henry James: Stories of the Supernatural* (New York: Taplinger, 1980) 432.

「容易にひっかからない読者をひっかけるための」⁴⁾ 技巧に富んだ物語だと解釈できるのである。

Ⅲ

「友だちの友だち」が書かれた19世紀末には、幽霊はすでに日常生活からはすっかり姿を消してしまっていた。すなわち、人々はすでに幽霊が実際に存在するということは信じなくなっていたのである。これにはルネッサンスの懐疑主義や啓蒙時代の科学の発展が貢献して、理性派の人々の見解が強化されたことによる。しかしながら、もはや幽霊は実在しないと思いつつも、相変わらず幽霊を目撃する人がいたことは現在と変わらぬ事実であった。そこで当時の理性派の人々は、幽霊を想像力の産物として人間精神にその源泉を見出していた。すなわち、彼らは「伝統的な幽界を否定せず、心理学の領域に転置したのである。幽霊たちは祓われたのではなく、ただ内面化され、せん妄的な思考ということで再解釈を加えられた」⁵⁾ のだ。それでも幽霊を目撃した人の中には、理性派の人々の見解に納得できず、米国内で勃発したスピリチュアリズム（降霊術）に傾倒していく人も多かった。「19世紀後半から20世紀初頭にかけての数10年間は、心霊現象が最も華やか」⁶⁾ で、それは英国でも多くの知識人を巻き込んで社会問題にまで発展していた。

ジェームズの幽霊が登場する作品も、このような社会環境を背景に生まれている。ジェームズが、当時の心霊現象に関心を示していたことは周知の事実である。ジェームズの兄ウィリアム・ジェームズは、イギリス「心霊現象研究会」の会長をつとめていたし、当時の知識人の多くが心霊術の影響を受けていたことを考えると、ジェームズが心霊現象に関心を抱いていたとしてもおかしくない。ただ「心霊現象研究会」に属していた多くの知識人の中には、狂信的な会員と違って、心霊現象そのものよりもその現象の背後にある精神性や心理に興味を抱いていた人が多かったと思われる。もちろんジェームズの場合も、彼は心霊現象に興味を抱いてはいたが、決して幽霊の存在を信じていたわけではなかった。このことは、青木次生がすでに指摘しているように、ジェームズが『アspanの手紙』に付した序文に、心霊現

4) ジェームズはニューヨーク版の序で「アミュゼット (amusette)」について言及している。“a piece of ingenuity pure and simple, of cold artistic calculation, an *amusette* to catch those not easily caught . . . , the jaded, the disillusioned, the fastidious.” また青木次生「ヘンリー・ジェームズ」芳賀書店 1998年 82-83ページ、および古茂田淳三『H・ジェイズ「ねじのひねり」とその前後の小品』英宝社2001年 146-48ページ。参照。

5) テリー・キャッスル高山宏訳「ファンタズマゴリア」『幻想文学37』幻想文学出版局 1993年 29ページ。

6) 近藤千雄「序—知られざる、ドイルのスピリチュアリズム研究」『コナン・ドイルの心霊学』コナン・ドイル 近藤千雄訳 新潮選書 1992年 20ページ。

象を否定する言及がみられることから明かである。⁷⁾ 彼が興味を抱いていたのは、幽霊を目撃する人々の内面心理であり、それがいかに幽霊なるものを現存させるに至るかということであった。そしてこれが、一連の幽霊物語を創作する動機になっていたと考えられる。

「友だちの友だち」の「私」は、婚約者や女友だちのように幽霊を目撃していない。すなわち心霊体験がないのである。したがって、彼らの体験に対し非常に興味を抱いていると同時に、自分ができないことを共有している二人を、ある種羨ましく思っているようにも見受けられる。さらに「私」が気になるのは、彼と彼女が過去に共通の体験をしたというだけでなく、友だち関係においていつの間にかつながっていき、まるでお互いが呼び寄せあっているような不思議な関係にあることだ。たとえば、彼女は社交的な女性ではないが、彼女が友だちになる人はどういう訳か彼のことを知っていて、会話に彼が登場する。タイトルの「友だちの友だち」は、二人を知る人が知らず知らずにつながっていく様子を暗示していると思われる。しかも、この二人は恐ろしく似ている。

They were so awfully alike: they had the same ideas and tricks and tastes, the same prejudices and superstitions and heresies; they said the same things and sometimes did them; they liked and disliked the same persons and places, the same books, authors and styles; any one could see a certain identity even in their looks and their features. (402)

彼らは、考えも癖も好みも同じで、偏見も迷信も異端説まで同じである。同じことを言ったりしたりするし、人、場所、本、作家、文体などの好みがすべて同じだ。彼らの外観や容貌にもある同一性が見られるほどである。とにかく不思議なほど似ている。そして二人とも写真に撮られることを極力嫌っているのも共通点である。このように似たもの同士なら必ず出会うはずだ（“Birds of a feather flock together”）(397) というのが「私」の信念にも似た仮説である。ところが、お互いたえずれ違って会うことがない。

... the strange law that had made them bang so many doors in each other's face, made them the buckets in the well, the two ends of the see-saw, the two parties in the state, so that when one was up the other was down, when one was out the other was in; neither by any possibility entering a house till the other had left it, or leaving

7) 青木次生『ヘンリー・ジェイムズ』芳賀書店 1998年 61ページ。

it, all unawares, till the other was at hand. (402)

二人が、なかなか会えないにもかかわらず、いやそれ故に、必ず出会う運命にあるという「私」の仮説はますます強まっていく。それから「私」は二人を引き合わせようと懸命になるが、その出会いは結局五年間も実現しないままになる。確固たる考えが実現するか否か、それが次第に「私」の強迫観念のようになり、それを実現させることが生き甲斐ようになっていく。ところが、女友だちはその出会いを果たさないうちにこの世を去ってしまう。彼女が彼に会わずに死んでしまったなら、「私」の考えは成立しない。

ところが、「私」の仮説を立証するかのように、婚約者のもとに彼女が現れたという。彼の前に現れたのは生きている彼女であったと解釈できる部分をジェイムズは残している。この点に関しては古茂田淳三の論文が詳しいが、⁸⁾ 彼がいくら生きている彼女に会った（“I saw her living — I saw her to speak to her — I saw her as I see you now”）と主張しても、「私」には彼女が死ぬ前に彼に会いに来たとは信じられない。それは「私」に絶対にあり得ないことなのだ。

It was my theory, my conviction, it became, as I may say, my attitude, that they had still never “met;” and it was just on this ground that I said to myself it would be generous to ask him to stand with me beside her grave. (419) (下線部筆者)

自らの説に固執する「私」に唯一残された仮説の証明方法は、彼女を幽霊にすることであった。そして、彼と彼女の完全な結びつきは霊界で実現することになる。このことを例証するのは、物語の最後で彼女が語っている次の部分である。

When six years later, in solitude and silence, I heard of his death I hailed it as a direct contribution to my theory. It was sudden, it was never properly accounted for, it was surrounded by circumstances in which — for oh, I took them to pieces! — I distinctly read an intention, the mark of his own hidden hand. It was the result of a long necessity, of an unquenchable desire. To say exactly what I mean, it was a response to an irresistible call. (424) (下線部筆者)

8) 古茂田淳三『H・ジェイムズ「ねじのひねり」とその前後の小品』英宝社 2001年 141-60ページ。

ここで「私」は、先ほどあげた例文にあるのと同様、「私の説」という言葉を繰り返している。また、彼の死が「長い間求められていたことの結果」であり、「抵抗することのできない求め」に応じたとある。彼は、死ぬことによってようやく「私」が想像した通り、彼女との出会いを確かに果たしたことになる。

IV

「私」が使う「説」(“theory”)という言葉からも、彼女が自らの考えの虜となっていることが理解できる。彼女の説とは、心霊現象を経験する二人の非常に似通った人物がいたならば、必ずやお互いに呼び寄せあうことになるという信念である。彼の前に現れたのが生きていた彼女であるはずがない。それならばそれが幽霊であれば「私」の仮説は成立する。

もしも、「私」が仮説などにとらわれず、婚約者のところに会いにきた女友だちは彼が主張するように生きていた彼女だったと信じる事ができれば、彼女の死後にまで二人が会っていると想像し、嫉妬する必要はなかったはずである。ところが、自らの仮説を成立させるためには、それは幽霊だったと主張して、彼女の死後も二人が密会していることを認めざるを得ない。「私」は自らの仮説の世界に彼を強引に引き込み、その犠牲にしてしまっただけでなく、自分自身もその犠牲となって彼と別れる結果になっている

しかし、ここでこの物語全体を振り返って考えると、すべては「私」が作りだした物語ではないかという疑問が生じる。すでに述べたように、婚約者と女友だちはその類似点を強調することによって、まるで同一人物のように描かれている。このことは二人が同時に「私」の前に姿を現すことはないという事実からもうかがえる。さらにも名前が明かされておらず、また写真にとられることを嫌っている。「私」は何とか婚約者の写真を手に入れるが、女友だちの写真は結局入手できない。これは、写真がとらえることのできない実体のない存在を象徴していると考えられる。さらに、「私」は婚約者と別れ、また彼が亡くなった後も、悲しむどころか予想通りといわんばかりに満足さえしているようなのだ。これらのことから、「彼女」というのは「彼」と一体化した、あるいは「彼」の分身的存在で、「私」の幻想が生み出した幽霊ではないかと考えられるのである。この点に関しては、クリスティーナ・アルバーツも同様の興味深いコメントを述べている。

... the two unnamed friends never appear together, and have no names, because they are really one and the same, or are simply the male and female version of the narrator, or perhaps do not exist at all.⁹⁾

9) Christina E. Albers, *A Reader's Guide to the Short Stories of Henry James* (New York: G.K. Hall, 1997) 284.

アルバーツによると、婚約者の存在すら不明で、これもまた語り手の想像の産物であるとして主張している。要するに、「友だちの友だち」は、心霊現象に大いに関心を抱いていた語り手「私」が、婚約者と心霊体験を共有するような女性がいるならば、必ず二人は会うはずだという仮説にとらわれ、それによる妄想が生み出した幽霊物語だと考えられる。語り手は、物語を語るうちに、その内容がまるで現実のような錯覚に陥り、彼と彼女の関係に嫉妬しているのだ。これこそまさに、前置きの編集者らしき人物が指摘しているように、女性の日記が「他人のことを話しているようでありながら、自分のことを話している」という所以である。

ジェイムスが、アミュゼットという「おとぎ話」を創作し、技巧を楽しんでいたことはすでに述べた。それならば、この「友だちの友だち」も、語り手の「私」が完全に理解することができない婚約者との結婚に対する不安を心霊現象に絡めて表出した物語に仕立てておきながら、あとですべては語り手による「空想物語」だったと暴露して読者を楽しませるといった、まさに「読者を引っかける」ための極めて興味深い、そしてまさに技巧的なアミュゼットであると考えられる。

参考文献

- Albers, Christina E. *A Reader's Guide to the Short Stories of Henry James*. New York: G. K. Hall, 1997.
- Bohm, Harold. *Henry James's Daisy Miller, The Turn of the Screw, and Other Tales*. New York: Chelsea House, 1987.
- Edel, Leon. "Introduction to *The Turn of the Screw*." *Henry James: Stories of the Supernatural*. New York: Tappan, 1980.
- James, Henry. "The Friends of the Friends". *Henry James: Stories of the Supernatural*. Ed. Leon Edel. New York: Tappan, 1980.
- Lusting Timothy J. *Henry James and the Ghostly*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Wilson, Edmund. "The Ambiguity of Henry James". *Henry James: Critical Assessments Vol. III*. Ed. Graham Clarke. The Banks, Mountfield: Helm Information, 1991.
- 青木次生『ヘンリー・ジェイムズ』芳賀書店 1998年。
- キャッスル, テリー・高山宏訳「ファンタズマゴリア」『幻想文学37』幻想文学出版局 1993年。
- 古茂田淳三『H・ジェイムズ「ねじのひねり」とその前後の小品』英宝社 2001年。
- 近藤千雄「序—知られざる、ドイツのスピリチュアリズム研究」『コナン・ドイルの心霊学』コナン・ドイル 近藤千雄訳 新潮選書 1992年。